

懐かしのパリを語るーパリ駐在



気候

夏はパリ観光に最適で最高だが…、秋・冬・春が暗い寒い長いためパリに住むのは辛い…!?

夏 6 月～8 月は気温 15 度～25 度、冷涼で乾燥しており大変過ごしやすいが、年間数日程度は 32 度を超える暑さがあります。

秋 9 月～10 月と春 3 月～5 月は、天候が不安定で寒い日・暖かい日が交互し、10 月でも真冬並みの寒さとなることもあります。冬 11～2 月は、高緯度なので昼間の時間が短く、曇りや雨の日が多いため日照時間が少ないし、年間で数日パリでは気温が-10 度・郊外でも-20 度前後まで下がり、道路が凍結することがよくあります。

経済

2014 年のパリ都市圏の総生産は 6,798 億ドルであり、東京都市圏、ニューヨーク都市圏、ロサンゼルス都市圏、ソウル都市圏、ロンドン都市圏に次ぐ世界 6 位の経済規模を有する。

多国籍企業の本社数や資本市場の規模など、ビジネス分野を総合評価した都市ランキングでは、ロンドンと共にヨーロッパでトップクラスである。

工芸品・贅沢品・服飾品などのビジネスの集積地で、19 世紀にはオートクチュール（オーダーメイド服）への道を開き、ファッションショーなどを開催し、メディアも活用し巧みにイメージを作りだし、新興の富裕層（ブルジョワジー）の欲望を掻きたて金儲けを行ったが、オートクチュールのビジネスは 20 世紀後半には衰退し、現在では主としてプレタポルテ（高級な既製服）を扱うようになった。

ショーの華やかな見た目に惑わされている一般人には見えないが、ファッションウィーク期間中のパリというのは、デザイナー側とバイヤー側が直接に会して、ビジネス上の冷徹でしたたかな交渉が行われる商業ビジネスの空間でもある。



パリ駐在(1990～1994)生活スタート

ブローニュの森南東のラヌラグ公園中心に広がる街 16 区にて、地下鉄ラ・ミュエット駅と郊外高速鉄道パッシーラ・ミュエット駅から歩いて 2～3 分の賃貸マンションに住み、パッシー通りを歩いて 5 分のマルシェで日常の買い物、地下鉄ラ・ミュエット駅からシャンゼリゼ通りの ANA 支店に、また郊外高速鉄道パッシーラ・ミュエット駅からシャルル・ド・ゴール空港の ANA 空港所・整備事務所に通勤、後にフランス・ルノー車を購入して左ハンドルで通勤、さらにパリ近郊旅行・ゴルフプレー・フランス国内旅行などでもフランス・ルノー車が大活躍しました。

我が街での日常生活は、「ラヌラグ公園」で散歩・ジョギング、「マルモッタン美術館」で有名画に、ブローニュの森のプレ・キャトラン公園の「シャレ・デ・ジル レストラン」で豪華ランチに、ボール・デュメ通りを歩いて 10 分のシャイヨ宮で「エッフェル塔」に、そしてブーランヴィリエ通りを歩いて 10 分のグルネル橋で「自由の女神像」に出会うなど、日々観光スポットとの出会いで、「思い出のパリを語る」として地図・概説・写真を編集しました。

エッフェル塔

1889 年のフランス革命 100 周年を記念して、パリで第 4 回万国博覧会の開催が 1884 年に決定された。1886 年万博の目玉となる大建造物を選定するためコンペティションが開かれ、1886 年 6 月 3 日コンペティション最優秀作品として「エッフェル塔」案が満場一致で採択された。講評は「1889 年の万国博覧会用に建てられる塔は決定的な特徴を持ち、金属産業の独創的傑作としてこの目的に充分適うのはエッフェル塔のみと思われる」ということであった。

建設候補地となったのはセーヌ川をはさんだシャン・ド・マルスとトロカデロの 2 つの地区であったが、トロカデロは地下に空洞があったため地盤が不安視され、シャン・ド・マルスへの建設が決まった。1887 年 1 月 8 日には本契約が締結され、1887 年 1 月 28 日に起工式が行われ、エッフェル塔建設が開始された。まず 6 月 11 日には基礎が完成、つぎに 4 本の脚、1 階の展望台、2 階展望台、3 階展望台、そして 1889 年 3 月 30 日に完成、3 月 31 日にはピエール・ティラール首相らを招いて竣工式が行われた。建設は万博に間に合わせるため、2 年 2 か月という驚異的な速さで完成した。

1889 年 5 月 6 日に開幕したパリ万博において、エッフェル塔は目玉となり、パリのみならず世界中から観光客が押し寄せ、会期中にエッフェル塔を訪れた著名人としては、イギリスの皇太子であるエドワード王子や、大女優サラ・ベルナール、バッファロー・ビル、トーマス・エジソンなどがいた。

エッフェルはエジソンを塔最上階の私室に招き、エジソンは彼の発明した蓄音機をエッフェルへと贈ったが、これはこの博覧会におけるハイライトのひとつだった。

塔の1階にはフランス料理、フランドル料理、ロシア料理の3軒のレストランおよびアングロ・アメリカン・バーが設けられていた。

エッフェル塔は大盛況となり、1889年の入場者数は200万人を記録した。

万博終了後、エッフェル塔の来訪者は減少していったが、なおも年間10万から20万人台の入場者数は保っていた。

1900年に再度パリで万国博覧会が開催されることが決定すると、エッフェル塔はふたたび万博のパビリオンとして多くの観光客を集めたが、その後の入場者数は低迷を続けた。

こうしたことから、塔の権利がパリ市に移る1909年には解体されることが確実視されていた。

しかし、1904年フランス軍で通信を担当していたギュスターヴ・フェリエが軍事用の無線電波をエッフェル塔で送受信することを提案し、そのため国防上重要な建築物ということで取り壊しを免れることになると共に、この電波塔としての役割は非常に重要なもので、現代に至るまでエッフェル塔の主目的の一つとなっている。

エッフェル塔の構造は、第1展望台が57.6m、第2展望台が115.7m、最も高い第3展望台が276.1m、当時の水圧エレベーターが今でも現役で稼働、また第2展望台までは階段でも昇ることができ、さらに塔の支点の下には、水平に保つためのジャッキが今でも使われている。

建設当時の高さは312.3m（旗部を含む）で、1930年にニューヨークにクライスラー・ビルディングが完成するまでは世界一高い建造物で、現在は放送用アンテナが設置されたため324mとなっている。



ニューヨークの「自由の女神像」 & パリの「自由の女神像」

ニューヨークにある自由の女神像は、アメリカ独立100周年を記念してフランスより贈呈され、1886年に完成した。ローマ神話の自由の女神・リベルタスをかたどった立像で、アメリカ合衆国の自由と民主主義の象徴です。

パリのリュクサンブール公園に、さらに一回り小さな自由の女神像が置かれていますが、ニューヨークの彫像準備作業のために作られたもので、1906年公園内に移設されました。

パリにある自由の女神像は、フランスがアメリカに自由の女神像を送ったことの返礼として、パリに住むアメリカ人たちがフランス革命100周年を記念して贈ったもので、セーヌ川のグルネル橋のたもとに位置し、高さ11.5m・重さ14ton、ニューヨークにあるものよりずっと小さく、1889年に除幕式が行われました。

左腕に抱える銘板には、フランス革命のきっかけとなったバスティーユ牢獄襲撃が起こった1789年7月14日の日付が刻まれています。



フランス革命

ルイ 16 世下のパリは芸術・科学・哲学の中心として威信を得る中、1783 年フランスの国家財政はもはや破綻、また 1788 年の不作によりフランス全土での飢餓や疫病で、パリでの食糧反乱が勃発した。

国王は食糧危機がより深刻化すると、警察権力のみでは対処が難しくなり、反乱を鎮めるために兵を駐屯させた。1789 年 7 月 13 日、弁護士カミーユ・デムーランは、政府で唯一正直であると人々に認知されていたジャック・ネッケル大臣がルイ 16 世に罷免された際、パレ・ロワイヤル広場で「武器を取れ!」という演説をして、パリ市民を蜂起し、翌 7 月 14 日、暴徒化した人々はアンヴァリッド武器庫から多数の武器を得てバスティーユ牢獄を襲撃し陥落した。これはフランス革命として最初の事件で、今でも 7 月 14 日はバスティーユの日として記憶されています。

その後、パリは革命の混乱に陥り、これにより食糧供給が悪化、怒った人々がヴェルサイユ宮殿を襲撃、ルイ 16 世自身は家族とパリに戻ることに同意して、王家はチュイルリー宮殿で囚われの身となり、現在のコンコルド広場に設置されたギロチンにより、1793 年 1 月にルイ 16 世、同年 10 月にマリー・アントワネットが処刑されました。

ナポレオン・ボナパルト

革命は徐々に急進化して内部紛争に移行、その対象は王族だけでなく革命に反対する人々も含まれ、1794 年 7 月には穏健派が主導権を握り、ついに急進派は処刑された。

1795 年、貴族の反乱が発生したが、若い軍人ナポレオン・ボナパルトの働きにより鎮圧された。

この後、ナポレオンはイタリア方面軍司令官に抜擢、当時フランスを脅かしていた諸国軍からの防衛を行った。

この際の成功により、エジプト遠征を命じられ、エジプトをもほぼ征服した。

ナポレオンは名声を得て帰国し、1799 年 11 月に独裁権を握り、翌年ナポレオンは政権の第一統領となる。

ナポレオンの治世下で、パリは帝国の首都となり、強大な軍事力を有した。

1804 年 5 月 18 日にノートルダム寺院で行った戴冠式により、ナポレオンは皇帝として即位した。

ナポレオンは当初、イギリス、オーストリア、ロシアとの間に軍事的な成功を収め、1806 年には戦勝記念としてエトワール凱旋門の建設が開始されました。

1814 年 3 月 31 日、パリはロシアに敗れ、パリは 400 年ぶりに他国による支配を受けた。

1815 年 3 月にはナポレオンがパリに帰還し百日天下となったが、6 月 18 日にワーテルローの戦いで運命的な敗北をして、ナポレオンは追放され、ルイ 18 世が復位し再び復古王政になりました。

1836 年には、ナポレオン時代より建設が続いていたエトワール凱旋門が完成。

1840 年 12 月 15 日、ナポレオンの遺骸がジョワンビル親王によって持ち帰られ、アンヴァリッドに安置された。



シャルル・ド・ゴール広場の凱旋門

エトワール凱旋門(Arc de triomphe de l'Étoile)は、シャンゼリゼ通りの西端にあり、この凱旋門を中心にシャンゼリゼ通りを始めとして12本の通りが放射状に延びており、その形が地図上で光り輝く星のように見えることから、エトワール広場(la place de l'Étoile)と呼ばれていて、「エトワール広場の凱旋門」が正式名称でしたが、後年にシャルル・ド・ゴール広場(Place Charles-de-Gaulle)と変更され、「シャルル・ド・ゴール広場の凱旋門」に変更されました。凱旋門 Arc de triomphe の直訳が「戦勝のアーチ」であることでも分かるように、これ自体は戦勝記念碑である。そのため、凱旋門はパリだけでもカール・ゼル門、サン・ドニ門、サン・マルタン門など多数が存在する。



コンコルド広場のオベリスク

フランス革命勃発により「革命広場」と呼ばれるようになり、後にルイ 16 世やマリー・アントワネットへのギロチン刑が行われた場所でもあった。

1795 年のヴァンデミエールの反乱において、当時軍司令官副官であったナポレオン・ボナパルトが王党派を鎮圧後、現在の「コンコルド広場」という名前で呼ばれ始める。

広場の中心部にはエジプトのルクソール神殿のオベリスクが置かれているが、これはムハンマド・アリー朝 エジプト国王 ムハンマド・アリーから贈られ 1836 年に運ばれたものである。

オベリスクは古代エジプト期に製作され、神殿などに立てられた記念碑(モニュメント)の一種で、近代および現代においては、欧米の主要都市の中央広場などにも建設され、その地域を象徴する記念碑である。

オベリスクの名称は、後世のギリシャ人が obeliskos(串)と呼んだのが起源で、先端部はピラミッド状の四角錐(ピラミディオン)になっており、創建当時はここが金や銅の薄板で装飾され、太陽神のシンボルとして光を反射して輝くようになっていたと共に、その影を利用して日時計としての役割も果たした。



パリの都市軸・歴史軸

ルーヴル美術館の「ラ・ピラミッド」、カルーゼル広場の「カルーゼル凱旋門」、コンコルド広場の「オベリスク」、「シャンゼリゼ大通り」、シャルル・ド・ゴール広場の「凱旋門」、そしてラ・デファンスの「新凱旋門グランドアルシュ」が一直線上になっていて、この軸線を強く意識しながら、なおかつそれを活用した開発が行なわれてきた。

ラ・デファンス(La Défense)とは、フランスのパリ西部近郊にある都市再開発地区で、超高層ビルが林立し、パリ市内の伝統的な景観とはかけ離れた現代的な景観を形成している。

また、地区内では主要な道路や鉄道が地下に配置され、地上部分には広大な人工地盤が広がっていて、歩行者に開放された広大な空間になっていて、主要な施設の間を結んでいる。





ルーヴル美術館

ルーヴル美術館中庭を東端に、シャンゼリゼ通りを経て、ラ・デファンスの新凱旋門グランダルシュを西端とするパリの都市軸・歴史軸の起点となっていて、王室所有の美術館として正式に開館したのは1793年、建物の構造上の問題から1796年に閉館され、1801年に再度開館した。

フランス皇帝ナポレオンが、諸国から美術品を収奪した所蔵品は増大し、美術館も名前を「ナポレオン美術館」と改名したこともあったが、ワーテルローの戦いで敗戦したナポレオンはフランス皇帝位を追われ、ナポレオン軍が収奪していた美術品の多くが元の持ち主たちに返還されている。

王政復古でフランス王となったルイ18世、シャルル10世の統治時代、フランス第二帝政時代、そして第三共和政の時代にも、ルーヴル美術館の所蔵品は遺贈や寄贈などによって着実に増えている。

2003年には「イスラム美術部門」が創設され、所蔵品が「古代エジプト美術部門」「古代オリエント美術部門」「古代ギリシア・エトルリア・ローマ美術部門」「イスラム美術部門」「彫刻部門」「工芸品部門」「絵画部門」「素描・版画部門」の8部門に分類されることになる。



カローゼル凱旋門

ルーヴル美術館の両翼に挟まれたカローゼル広場の中央にある「カローゼル凱旋門」は、1808 年ナポレオンの勝利を記念して建てられたが、ナポレオンのお気に召さなかったようで、後に造らせたのがパリの象徴とも言えるエトワール広場の凱旋門であり、現在のシャルル・ド・ゴール広場の凱旋門である。



オルセー美術館

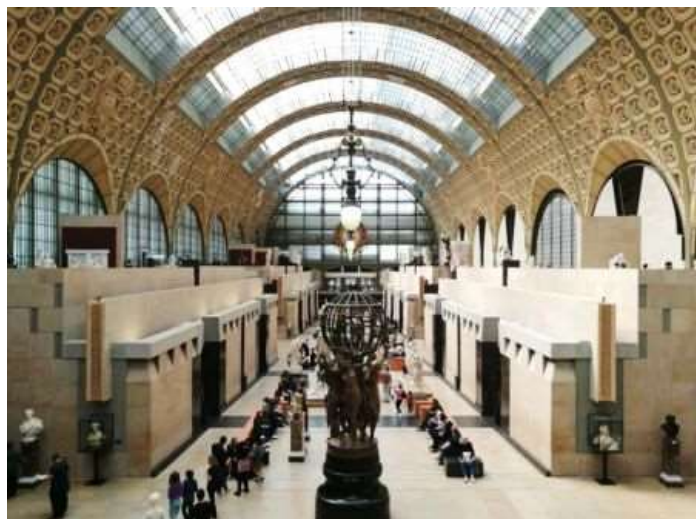
オルセー美術館の建物は 1900 年のパリ万国博覧会開催に合わせて、オルレアン鉄道によって建設されたオルセー駅の鉄道駅舎兼ホテルであった。

オルセー駅はオルレアンやフランス南西部へ向かう長距離列車のターミナルであり、かまぼこ状の大屋根に 10 線以上のホームを備えていたが、狭くて不便だったことから、1939 年に近距離列車専用駅となり大幅に縮小した。その後、一時取り壊しの話もあったが、1970 年代からフランス政府によって保存活用策が検討されはじめ、19 世紀に入り美術品を展示する美術館として、1986 年オルセー美術館が開館した。

美術館の中央ホールは、地下ホームのトレイン・シェッドによる吹き抜け構造をそのまま活用していて、建物内部には大時計など、鉄道駅であった面影が随所に残る。

なお、旧印象派美術館の収蔵品はすべてオルセー美術館に引き継がれ、原則として 2 月革命のあった 1848 年から第一次世界大戦が勃発した 1914 年までの作品を展示し、それ以前の作品はルーヴル美術館、それ以降の作品はポンピドゥー・センターという役割分担がなされている。

オルセー美術館は絵画、彫刻だけでなく、写真、グラフィック・アート、家具、工芸品など 19 世紀の幅広い視覚芸術作品も収集・展示の対象になっているが、なんといっても印象派やポスト印象派など 19 世紀末のパリ前衛芸術のコレクションが世界的に有名だ。





マドレーヌ寺院

1805 年ナポレオンがフランス軍の名誉を讃える栄光の神殿とすることを決定し、古代神殿風デザインで設計させ、1806 年に工事を再開したが、ナポレオンの失脚により、ルイ 18 世によってカトリック教会に用途が戻され、1842 年に完成した。

その外観はキリスト教の教会としてはかなり異例で、外観はコリント式の高さ 30m の柱を 52 本並べるなど、古代ギリシャ・古代ローマの神殿を模したネオ・クラシック様式で、内部はコリント式の大円柱が連続するペンデンティブームの天井を支えている。

正面は「最後の審判」の彫刻に飾られ、銅の扉には「十戒」をテーマにしたレリーフが施されている。

内部に入ると右側に「聖母マリアの婚礼像」が、左側には「キリストの洗礼像」が安置され、主祭壇は「聖マグダラのマリアの歓喜像」で飾られている。

このように多くの美術作品で飾られているマドレーヌ寺院だが、建物内には「王室の間」と呼ばれる部屋があり、現在は美術展など限られたイベントが実施されている。

パイプオルガンが 1849 年に設置され、歴代のオルガン奏者は著名な演奏家・作曲家で占められ、その一人であるガブリエル・フォーレが「レクイエム」の初演を行ったことでも知られる。



オペラ座

オペラ大通り正面にひとときわ豪華なたたずまいを見せているパリ・オペラ座、その堂々たる姿は、周囲の古い建物を圧倒しているかのようだ。

パリのオペラ・バレエの殿堂として世界にその名を誇り、このひのき舞台を踏むことを夢見る歌手・バレリーナたちは多い。

1989年にオペラ・バステューが新たに完成し、現在は主にここでオペラ公演が行われる。

こちらはバステュー・オペラ座、または新オペラ座とも呼ばれ、単にオペラ座と呼ばれることはまれである。



ヴァンドーム広場

1718年以降、広場近くにはフランス司法省や投資銀行のJPモルガン・チェースのパリ支店が入っている。

ナポレオンが、ラ・ペ通り(平和通り)を開通させ、20世紀には広場の通行量は大きなものになっている。

ヴァンドーム広場はファッショナブルでデラックスなホテル群で有名で、ザ・リッツことオテル・リッツ・パリ、パーク・ハイアット・ヴァンドーム、またエドワード7世も常連だったブリストルは現在オテル・ド・ヴァンドームとなっている。ラ・ペ通り(平和通り)は、ヴァンドーム広場の北側からオペラ広場まで走る通りで、主にジュエリーや時計のラグジュアリーブランドが軒を連ねる。

カルティエ本店のほかピアジェ、ダンヒル、ティファニー、ブルガリ、コンコルド広場ロワイヤル通り発祥のフレッド、1972年創業の新進ジュエリーブランドポワレなどが店を構える。





バスティーユ広場 & オペラ・バスティーユ

1789年7月14日、パリ市民は圧政や国王の権力の象徴であったバスティーユ牢獄を襲撃した。バスティーユ牢獄を取り囲んだ群衆は牢獄側に投降を呼びかけ、牢獄の武装解除や武器庫に保管されている武器や弾薬の開放を求めたが、交渉は思うようにまとまらず、一部の群衆が中庭に繋がる跳ね橋を落とし侵入したため、守備兵が発砲して応戦したため銃撃戦となり、バスティーユ牢獄は陥落し、囚人たちは解放された。

1855 年牢獄の跡地にバスティーユ駅が建設されたが、駅舎は解体され、駅舎跡地にはオペラ・バスティーユが建設され、革命 200 周年記念の 1989 年 7 月 14 日に落成された。

バスティーユ牢獄があった場所が現在のバスティーユ広場にあたり、オペラ・バスティーユが広場を代表する建物といえる。

また、もともと牢獄の堀であった部分はサン・マルタン運河と接続されて、遊覧船の発着港となった。
火曜日と日曜日にはバステュー広場に併設されている公園を中心に大規模な青空市場が開かれ、衣類のほかにも果物・魚・肉・チーズ・パンなどさまざまなものが売られている。

現在、広場周辺はカフェやオフィスなどが立ち並ぶ商業地域になっており、サンタントワーン通りが広場を突き抜けるように走っている。





サント・シャベル教会

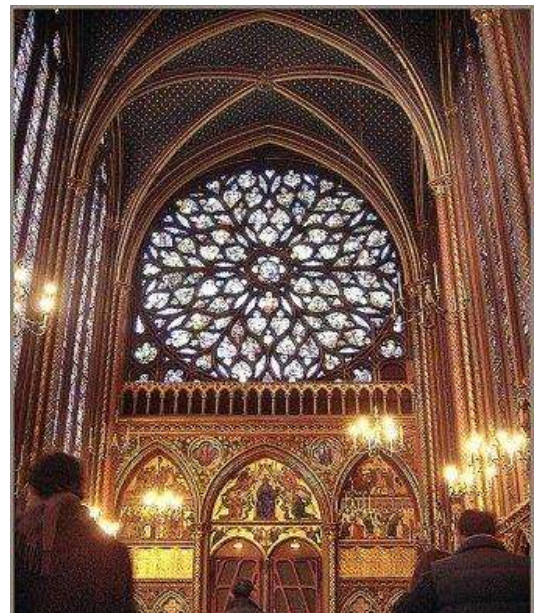
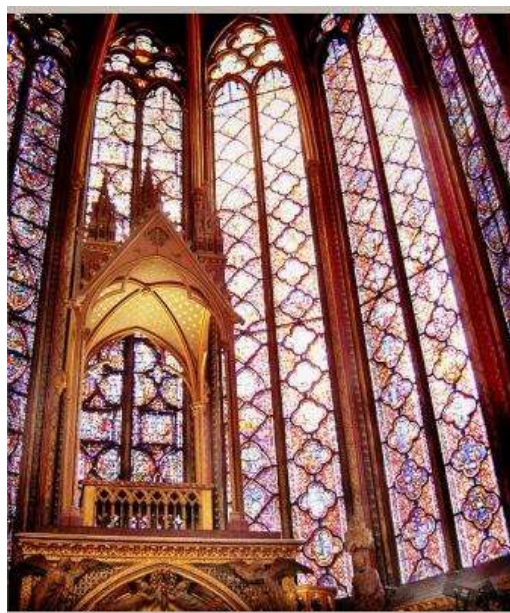
パリの中心部、シテ島にあるゴシック建築の最高峰の1つといえるサント・シャベル教会は、1862年に歴史的建造物に指定され、現在は国立モニュメントセンターが管理運営している。

シテ島の裁判所の隣にひっそりと佇むサント・シャベル教会は、パリ最古のステンドグラスが織り成す光の芸術で「聖なる宝石箱」と称えられるほどである。

必見は、創世記からキリスト復活までの聖書にちなんだ物語を再現しているパリ最古のステンドグラスで、まさに「聖なる礼拝堂」という名前にぴったりである。

1階の礼拝堂は、高さ7mほどの天井に星が描かれ、階段を上りきって振り返ると見えるのが2階礼拝堂の見事なバラ窓になっている。

1階礼拝堂の周りを取り囲む15の大窓で作られたステンドグラスの色は、赤と青を基調としたもので、朱色に染まる時間帯、聖なる青に包まれる時間帯、正面に光が差し込めば黄金色に輝いて見えるということで、季節や訪問時間によって表情のまるで違う教会です。



ノートルダム大聖堂

ゴシック建築を代表する建物であり、パリのシテ島にあるローマ・カトリック教会の大聖堂で、ノートルダム寺院とも呼ばれている。

「パリのセーヌ河岸」という名称で、周辺の文化遺産とともに 1991 年にユネスコの世界遺産に登録された。

ノートルダムとはフランス語で「我らが貴婦人」すなわち聖母マリアを指す。

パリのノートルダム司教座聖堂は建築様式の観点からは、ロマネスク様式のテイストを一部に残した初期ゴシック建築の傑作といえる。

一般に、ゴシック聖堂は完成までに数十年から数百年を要するため、時代ごとに微妙に異なる様式が混在している場合が多い。

ゴシック建築は彫刻やステンドグラスを駆使して、聖書や聖人伝のさまざまなエピソードを表現している。

パリのノートルダム大聖堂では、とりわけ 3 つの薔薇窓のステンドグラス、正面ファサードの 3 つのポルタイユ上のレリーフが重要である。

実際に、大聖堂内には 9000 人をも収容でき、トリビューンには 1500 人もの人々が昇れるようになっている。

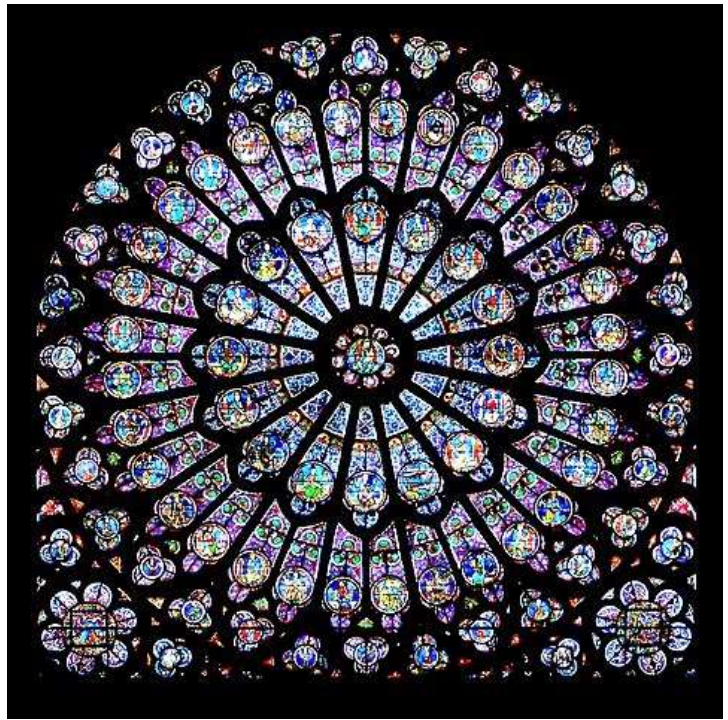
歴史的にも多くの祝賀行事や記念式典などが開かれてきた。

1302 年 4 月 10 日、フィリップ 4 世の招集による第一回全国三部会開催。

1455 年 11 月 7 日、ジャンヌ・ダルク復権裁判の開始。

1804 年 12 月 2 日、帝政を宣言したナポレオン・ボナパルトの戴冠式。

2015 年 11 月 15 日、パリ同時多発テロ事件の追悼ミサが開かれ、大聖堂前広場に大勢のパリ市民が集まった。





サン・ジェルマン・デ・プレ

歴史的地区であり、パリ高等美術学校に近いことから画廊が多い街である。

サルトルら哲学者が集まった場所として有名な 2 軒の喫茶店(カフェ・ド・マゴ、カフェ・ド・フロール)がある。

カルチエ・ラタンに隣接する。

リュクサンブール公園

リュクサンブール宮殿は、フランス元老院(上院)の議事堂として使用され、その周囲はリュクサンブール公園として一般に公開されている。

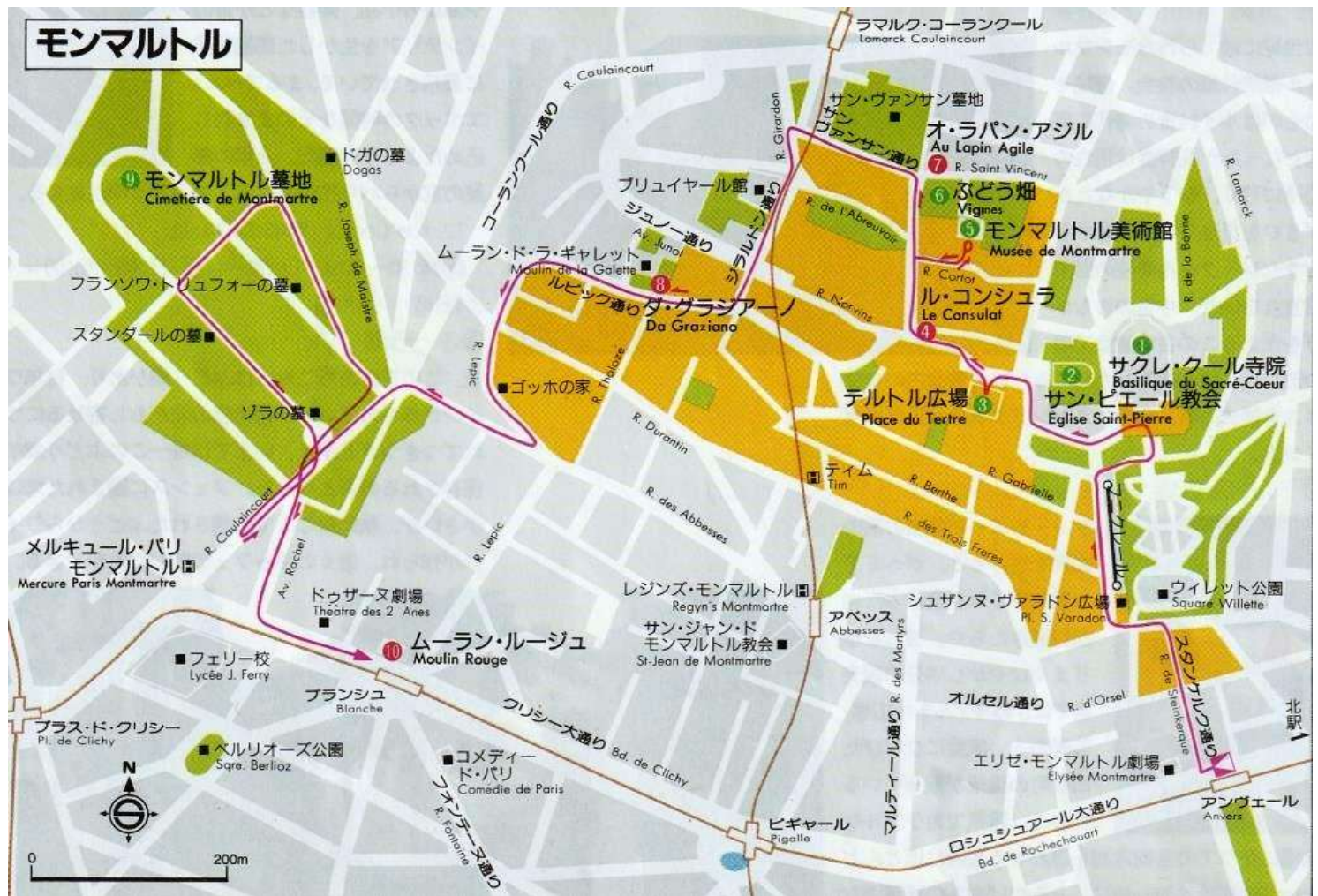
カルチエ・ラタンに隣接し、学生たちの憩いの場でもある。

カルチエ・ラタン

ソルボンヌ大学をはじめ大学が集中しており、昔から学生街として有名。

カルチエは「地区」、ラタンとは「ラテン語」のことであり、「ラテン語を話す、教養のある学生が集まる地区」という意味が語源になっている。





モンマルトル

パリ 18 区モンマルトルは、パリで一番高い丘(標高 130 メートル)にあり、現在パリ有数の観光名所で、サクレ・クール寺院、テルトル広場、キャバレー ムーラン・ルーージュ、モンマルトル墓地、そしてモンマルトルに唯一残るブドウ畑がある。

1876 年から 1912 年にかけてモンマルトルの丘にサクレ・クール寺院が建設され、白いドームは街中から見えるパリのランドマークになった。

パリの税金や規制が適用されず、また長年丘の上の修道女たちがワインを作っていたことは、モンマルトルが歓楽街になる原因となり、19 世紀末から 20 世紀初頭にモンマルトルは歓楽街となり、ムーラン・ルーージュやル・シャノワールといったキャバレーが軒を連ね、有名な歌手やパフォーマーらが舞台に立ち、有名な画家たちがそれらを描いたことでも有名な街である。



